

厚岸沿岸の岩礁潮間帯における底生生物相の季節変化

野田隆史（北海道大学大学院水産科学研究科）

要 旨

厚岸町をはじめ、根釧地域には岩礁海岸に多く見られる。その潮間帯（干潮時に冠出する場所）には様々な小型の海岸生物が生息している。そこで厚岸町とその周辺の岩礁海岸における潮間帯の生物相とその季節変化を調べた。

調査は厚岸町の門静、愛冠、末広、釧路町の入境学、浜中町の藻散布で行なった。それぞれの海岸ごとに5箇所の岩の斜面に横50cm×縦100cmのプロット（中央の高さは平均潮位に統一）をそれぞれひとつずつ設置した。さらにこのプロットを縦に10等分し、横50cm×縦10cmのコドラートに分けて調査した。そしてコドラートごとに出現した底生生物の種を記録した。また各プロットにおける固着生物の種別の被度を求めた。これらの調査は2004年の4月、7月、および11月に行った。

出現した底生生物は75種で、その内訳は移動性底生動物が10種、固着動物が10種、固着植物（海藻と海草）が55種であった。出現極数の季節変化を見ると、移動性底生動物、固着動物、固着植物で互いに異なっていた。移動性底生動物では秋が最も多く8種で次いで春の7種、夏が最も少なく3種であった。一方、固着動物では夏が最も多く7種で、ついで秋の5種、そして春がもっとも少なく4種であった。また、植物（海藻と海草）では、夏が44種と最も多く、ついで春の31種、秋が最も少なく29種であった。

移動性の底生動物では、5海岸とも藻食性の巻貝の一種であるクロタマキビが最も多く、その傾向はどの季節でも同じであった。本種は平均潮位より高い位置に多く分布する傾向があった。また、いずれの海岸でも夏や春に比べ、秋の個体数が多かった。クロタマキビについて個体数の多かった移動性の底生動物は、シロガイ類（シロガイとサラサシロカイの2種をあわせたもの）であった。本種は中潮位から低潮位に多く分布する傾向があった。また、いずれの海岸でも夏や春に比べ、秋の個体数が多かった。3番目に個体数の多かった移動性の底生動物は肉食性の巻貝の一種であるチヂミボラであった。本種は厚岸周辺では、主にキタイワフジツボを捕食しているところが観察されたが、その分布潮位のパターンはキタイワフジツボのそれとは一致せず、平均潮位より低い位置に分布の中心があることがわかった。また、いずれの海岸でも夏や春に比べ、秋の個体数が多かった。

固着動物の普通種（数多く出現する種）はキタイワフジツボであった。本種は入境学以外の海岸では、平均潮位付近に最も多く分布していた。本種の被度の季節変化の仕方は海岸によって異なり、藻散布では春が最も高く、夏に最も低くなった。一方、末広・愛冠・門静では秋が最も高く、夏が最も低くなった。また入境学では、夏が最も高く、春が最も低かった。植物（海藻と海草）の被度はいずれの海岸でも低潮位で高くなる傾向が認められた。また、固着植物の被度の季節変化は門静以外の海岸では、春に最も高く、夏に最も低くなるという共通したパターンが認められた。一方、門静では高潮位では夏の被度が他の時期より高くなる点を除いて明瞭な季節性は認められなかった。

海藻の被度を、優占種ごとに見てみるとクロバギンナンソウやピリヒバは低潮位に多いのに対し、フクロフノリでは中潮位で多いなど、種によって被度の高い潮位が異なっていた。また、被度の季節変化の仕方も海藻の種間で異なり、マツモやフクロフノリでは春が最も高く夏に最も低くなるのに対し、ピリヒバやクロバギンナンソウでは明瞭な季節性は認められなかった。